

# カミュ『カルネ』 第1分冊校訂の問題点

奈 蔵 正 之

物語 — 自分が正しいとはいひ張らない男。自分について他人が抱く  
考えのほうが好きなのだ。男は死ぬ。ひとりで、おのれの真実につ  
いて意識しつづけながら — こうした慰めのむなしさ。

(カミュ, 『カルネ』)<sup>1</sup>

## 1. はじめに

1935年から早すぎる死の直前の1959年末にかけて、カミュは9冊におよぶノートに、さまざまな事柄を書きとめていた。カミュ自身はこれらのノートを「カイエ *Cahiers*」と呼んでいたが、死後になって出版された時に編集者が「カルネ *Carnets*」という書籍名を採用したので<sup>2</sup>、本論文でもこの資料を『カルネ』と表記することにする。

『カルネ』はノート3冊ごとにまとめられて3巻本となり、1962年に第1巻、65年に第2巻、そしてずいぶんと時間が空いて89年に第3巻が、他のカミュ作品と同様、ガリマール社から出版された。だが、1960年代に出版され、長くカミュ研究の底本となってきた2巻のプレイヤッド版カミュ作品集には、『カルネ』は当然ながら収録されていなかった。2000年代になって新たに4巻本のプレイヤッド版『カミュ全集』（以下、「新PL版」と略称）が編纂・出版されたのに際し、今度は2つの部分にまとめられて、『カルネ』の前半が『全集』第2巻に、後半が第4巻に収められることになったのである<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> PLII, p.814. (引用文献の略号については、本論文の末尾を参照のこと)

なお、本論文におけるカミュのテキストおよびPL版注解の訳は、すべて筆者による拙訳である。

<sup>2</sup> 版元のガリマール社が、プレイヤッド旧版には収められなかったカミュのテキストや各種の資料を「カイエ・アルベール・カミュ」シリーズと銘打って出版することにしたため、それとの混同を避けるために、『カルネ』というタイトルが選ばれた。

<sup>3</sup> 『カルネ』旧版は以下のように編集されている。

1：1935年5月～1942年2月（第1ノート～第3ノート）

2：1942年1-2月～1951年3月（第4ノート～第6ノート）

3：1942年3月～1959年12月（第7ノート～第9ノート）

これに対して新PL版では、第1巻から第4巻までを編年体で編纂するという方針から、次のようにまとめられて収録されている。

『カルネ』はただの日記ではなく、記された内容は一様ではない。身辺些事、情景描写、知的考察、内的省察、小説などの作品のアイデアや具体的な構想、作品に利用することを想定した一節、長期旅行に際しての旅日記など、多岐にわたっている。生涯にわたって書き綴られたにもかかわらず合計でわずか9冊ということでも想像がつくとおり、日々こまめに記されたわけではなく、たて続けに書かれた断章もあれば<sup>4</sup>、1～2ヶ月何も書きとめられていない、という場合もある。カミュにとって『カルネ』に断章を綴るということは、自らの内的な世界に没入し何かを生み出すきっかけを作るといふ、特別な行為であつたらしく、特に若い頃のノートではその傾向が強い。そのために、規則的に記されることがなかったのであろう。

作品には現れていない作家の生の声を書きとめられているがゆえに、また作品のプランや下書きに近いものが散見されるがゆえに（ただし、作品によって、数多くの関連する断章がある場合もあるれば、そういった記述がほとんど見いだせない場合もあり、これまた一様ではない）、カミュの死後に出版されて以来、『カルネ』はカミュ研究において重要な基礎資料となっている。『カルネ』の記述について言及しない研究はほとんど見当たらないと述べても過言ではない。

ところが、旧版の『カルネ』の第1分冊（1935年5月～37年8月）において<sup>5</sup>、いくつかの断章の並びが実際の時間的順序とは異なるのではないかという疑念が以前から指摘されていた<sup>6</sup>。そこで新PL版では、3つの断章を旧版とは異なる位置において印刷するという方策が取られたのである。だが、新PL版における修正が正確であると無批判に認めることには、実は大きな疑問がある。また、新PL版の編者は見落としているが、本来あるべき所にはないのではないかという疑念が残る断章が他にも存在している。

問題となっているいくつかの断章は、身辺雑記や些細な省察のたぐいではなく、生前は未完に終わったものの事実上のカミュの処女小説である『幸福な死』*La Mort heureuse*の初期の構想に深く関わっている重要な資料である。それゆえ、カミュが小説家を目指してどのように自己形成をしていったかというテーマにも大きく関連してくるのである。

本論文は、『カルネ』第1分冊の各断章の精査を行い、また、自伝的事実や状況証拠を照らし合わせることで、新PL版における修正を批判的に検討しつつ、かねてから疑念が生じている断章のあるべき位置を特定することを目的としている。それは、初期のカミュにおける文学的自己形成を跡づける上で、ないがしろにできない研究の基盤となるはずである。

第2巻：1935年5月～1948年12月（第1ノート～第4ノートの途中まで）

第4巻：1949年1月～1959年12月（第4ノート途中～第9ノート）

<sup>4</sup> 『カルネ』における一まとまりの記述のことを、本論文では「断章」と呼ぶことにする。

<sup>5</sup> 以下、1冊目のノートのことを「第1分冊」と表記することにする。

<sup>6</sup> 第2分冊以降では、そのような疑念は生じていない。

## 2. 『カルネ』 分析表の解説

『カルネ』 第1分冊の概要を具体的かつ簡潔に把握できるように、筆者は、本論文18ページから22ページにおける分析表を作成した。その参照のしかたについて述べておこう。

**No.:** 『カルネ』 の各断章に通し番号を打ったもの。

カミュ関連の文献に掲載された実物の写真を見る限り、元のノートの断章と断章の間は行が開けられているだけであり、特に切れ目を示す記号は用いられていない。『カルネ』 が単行本で発行された際に校訂者（ロジェ・キヨ）は、読者の便宜を考えたのか断章と断章の間にアスタリスク（\*）を記すことにしたが、この形式は新PL版にそのまま引き継がれている。しかしこのままではどの断章に言及しているのかわかりにくいため、1から始まる通し番号を付けることとした。これはあくまでも研究の便のために筆者が施したものであり、原書には存在しない。

**PL 頁:** 『カルネ』 第1分冊は新PL版の第2巻に収められており、当該断章がその何ページに印刷されているかを示す。

**日付:** カミュは『カルネ』 を日記とは位置づけていなかったため、各断章がいつ書かれたのかという日付の記載は定期的ではない。日付とは言っても「何月」という簡便なものが多く、比較的に記されている期間もあれば、日付の記載がない断章がずっと続くという場合もある。

したがって、日付のない断章に関しては、その前後直近の日付を伴った断章を探し、その間の期間に書かれたと推定することになる。だが後述するように、この想定方法が大きな問題をもたらす結果となったのである。

**行数:** 『カルネ』 の各断章の分量は極めて不均一であり、わずか1行のものから原書で数ページにわたるものもある。その分量を把握できるように、原書（新PL版）における行数を記した。

**概要・備考:** 各断章の大まかな内容。「はじめに」でも述べたように、それぞれの断章の性格も極めて不均一である。

- ・ 内的なイメージや意識の移ろいを描いた「省察」。
- ・ 知的な思考を書きとめた「考察」。実際に見聞きした事柄や、小説の一場面などを思い浮かべて書きとめた「挿話」。前者か後者かが判然としないこともある。
- ・ 心をとらえたシーンを書きとめた「情景」。これはたいていの場合、情景からインスパイアされた心象風景へと移ろっていく。
- ・ 旅先での情景。旅行はカミュの感性を刺激し、あらたな考察や作品のヒントを生み出す契機となるが多かった。そのため旅先での情景の描写は長いものとなることが多く、その情

景からさまざまな考察や内的省察が生み出されていく。

- 作品のためのメモ。結果としてその一部や全体が作品に利用されることになったものではなく、初めから作品を想定して、創作ノートのようにして記された断章。当然、カミュ研究においては最も重要となるが、その数はあまり多くない。作品のテーマの「着想」、作品のプランをメモした「構想」、作品で用いるための描写や会話の「断片」などがある。

以上の分類はあくまでも便宜的なものであり、いずれにも分類できない断章や、複数の性格を併せ持つ断章もあることは言うまでもない。

**関連：**各断章のうち、カミュの作品形成との関連がはっきりと認められるものに「○」を、さらに文章が具体的に引用・利用されるなど、関連性が極めて密接なものに「◎」を施した。

**位置：**この時点に書かれたはずがない、つまり編纂上のミスによりあやまってその位置に置かれていると明らかに考えられる断章に「??」を、この時点で書かれた可能性がかなり低い断章に「?」を付した。本論文の考察における重要なポイントである。なお断章118には「\*」を付けてあるが、これに付いては後述する。

**CaNo：**1962年に出版された単行本『カルネ I』 *Carnets I* における断章の並びに通し番号を打ったもの（以下、この版のことを「旧版」と記す）。この後具体的に見るように、新PL版における断章の並び（上記 No.）とは部分的に一致していない。

### 『カルネ』第1分冊断章の分析表

No.	PL 頁	日付	行数	概 要 ・ 備 考	関連	位置	CaNo
1	795-76	35年5月	39	省察。母親への思い。小説の構想			1
2	796		5	ジャン・ゲルニエへの言及			2
3	796		5	省察。「経験」という言葉について			3
4	796-97		21	挿話。重い病気に罹った二人の女友達			4
5	797		6	情景。夏の嵐			5
6	797		1	一文。			6
7	797		11	省察。幸福と不幸			7
8	797-98		6	省察。友情について			8
9	798		20	挿話。クリスマスイヴにレストランで起きた殺人事件 →その後カミュテキストの中に何度も現れることになる重要なエピソード	◎		9
10	798-800	36年1月	66	長大な描写と省察。「世界」と自己。 →エッセイ「裏と表」にその大部分が用いられることになる、重要な断章	◎		10
11	800		2	箴言。「イメージでしか物は考えられない。哲学者たらんと欲すれば小説を書くべし」			11
12	800		7項目	キーワードの一覧			12前

No.	PL 頁	日付	行数	概 要 ・ 備 考	関連	位置	CaNo
13	800-01		18	35年の夏に過ごした、バレアレス諸島への旅に関する省察 →エッセイ集『裏と表』所収の「生きることへの愛」で利用される。	◎		15
14	801		18	上記断章13の旅で訪れた地名の一覧			16
15	801	2月13日	4	省察			17
16	801-2		10	省察。他者との関わり			18
17	802	3月	4	一日の情景			19
18	802		1	一文。タイトルの例			20
19	802		13	ゲルニエへの言及。共産主義に関する考察			21
20	802		1	一文。死と演技（賭？）			22
21	803		11	情景。冬の港と太陽。および心象風景			23
22	803	3月16日	19	情景。散策の描写と心象風景。 なお、単行本では「5月16日」という日付になっている。		?	24
23	803		7	省察。時の移ろいについて			25
24	804	3月	4	情景。空と雨と湾			26
25	804	3月	1	一文「僕の喜びに限りはない」			27
26	804		1	ラテン語の一文			28
27	804-05	3月	43	アルジェ郊外の療養施設での出来事。会話			29
28	805-06		22	人物「M」とその自殺願望に関する小説的描写 →前半は『幸福な死』におけるザグラーの描写として用いられる 後半は、『シーシュポスの神話』における1エピソードと関連	◎	?	30
29	806	3月31日	3	省察。女性達の優しさ			31
30	806		6	省察。執筆活動への意欲			32
31	806	4月	9	情景。暑さの始まり			33
32	806		4	情景。港の暑さ			34
33	806		3	省察。感覚と世界			35
34	807		21	挿話。1) 重傷を負った港湾労働者→『幸福な死』におけるエピソード 2) 死んだ子猫を食べてしまう母猫→『裏と表』所収の「ウイとノンの間」で利用される。	◎		36
35	807		2	港湾労働者の折れた脚			37
36	807		9	挿話。トラックの後を全速力で追いかける二人の若者 →『幸福な死』について『異邦人』におけるエピソードとして利用される。	◎		38
37	808	5月	14	省察。「世界」と離れぬこと			39
38	808	5月	8	省察。「自己崇拜」への批判			40
39	808	5月	2	1文。アルジェの女たちの美しさ			41
40	808-09	5月	16	省察。「演技」について			42
41	809		3	省察。神と自然			43
42	809		13	創作の計画。哲学著作（不条理性）と文学著作			44
43	809		2	マルローへの言及			45
44	809	5月	3	省察。「生」について			46
45	810		3	省察。「不道德者」			47
46	810		5	省察。絶望と希望			48
47	810		6	省察。知性について			49
48	810		12	小説の構想。「第二部」→『幸福な死』に関連	○	??	12後
49	810-11		19	パトリスという登場人物が「死刑囚」について語る言葉 小説の構想「第3部」→『幸福な死』に関連	○	??	13

No.	PL 頁	日付	行数	概 要 ・ 備 考	関連	位置	CaNo
50	811		7	小説に用いる素材。6つの物語 →『幸福な死』に関連	○	??	14
51	811-12	11月	9	考察。ギリシアについて			50
52	812		8	考察。東洋と西洋			51
53	812		2	考察。プロテスタンティズムについて			52
54	812	1月 (1937)	18	カリギュラに関する戯曲の構想と、終幕の台詞 (→ 実際の『カリギュラ』には用いられなかった)	○		53
55	813	1月	15	「世界を望む家」に関するエッセイの計画。キーセンテンスと台詞 → いくつか『幸福な死』II-3で使用される	○		54 55
56	813		2	「世界を望む家」が高台にあることへの言及→『幸福な死』II-3 で使用	○		56
57	813	2月	9	考察。「文明」について			57
58			7	劇団の巡回。オランダ地方の情景。			58
59	814	37年4月	3	省察。孤独について			59
60	814		1	一文「何者にも似まいという誘惑」			60
61	814		3	カスパでの省察と情景			61
62	814		2	省察。朝、太陽、骸骨			62
63	814		1	一文			63
64	814		3	登場人物「自分の正しさを明かそうとしない男」			64
65	814-15	4月	12	執筆の計画 1) 廃墟に関するエッセイ 2) 「魂の中の死」を再度取り上げる 3) 世界を望む家 4) 小説 5) マルローについてのエッセイ 6) 論文			65
66	815		4	情景。異郷での太陽			66
67	815		3	情景。夕暮れの湾における世界			67
68	815	5月	6	考察。心理学について			68
69	815		4	3つの単文			69
70	815-16	5月	13	『裏と表』の序文の草稿 → 実際には用いられなかった			70
71	816		4	考察。執筆という行為について			71
72	816		4	ルターの引用			72
73	816	6月	8	挿話。救いへの叫びを拒否する死刑囚 → 初めて現れる死刑囚のモチーフだが、この時期に『異邦人』 を着想したという根拠にはならない。			73
74	816		2	哲学と哲学者			74
75	816-17		10	考察。「文明」対「文化」			75
76	817		2	マルクス主義対霊的なもの			76
77	817		3	考察。「定め」について			77
78	817		8	考察。「地獄」について			78
79	817		4	考察。論理と非論理			79
80	817		1	一文。「不誠実」について			80
81	817		2	マルセルという人物の台詞			81
82	818		12	マルセルが語る、第一次大戦のシャルルロワの戦い →『幸福な死』においてエマニュエルが語るエピソードに利用 される。	◎		82
83	818		9	マルセルと、もう一人の人物の会話			83
84	818		5	マルセルの台詞。大食らいの孫について			84
85	818	7月	5	情景。アルジェのマドレーヌ地区			85

No.	PL 頁	日付	行数	概 要 ・ 備 考	関連	位置	CaNo
86	819		4	小説の案。「関わりを持たぬこと」			86
87	819		2	情景。空に浮かぶ気球			87
88	819		1	情景。松の姿			88
89	819		6	ジッドとキリスト教			89
90	819		15	プラハのホテルでの、フロント係とのやり取り →『幸福な死』第2部第1章の冒頭で用いられることになる。 ただし、この時点ですでに小説の構想があったという確証はない。	◎		90
91	820		3	列車の中で自分の手を見つめる人物 →『幸福な死』第2部第2章の冒頭とわずかな関わり	○		91
92	820		15	1936年の夏における、中央ヨーロッパの旅の旅程 → 後半のメモは、エッセイ「魂の中の死」後半の描写の原型と考えられる	○	??	92
93			5	イタリアの教会と絵画			93
94	821		1	一文。入党を前にした知識人			94
95	821	7 月	4	省察。男と女の感性の違い			95
96	821		3	挿話。あるカップル			96
97	821		7	挿話。列車での母子、およびカップル			97
98	821	37年 7 月	4	着想。「演技者の小説」			98
99	821	37年 7 月	6	「演技者」 会話の断片			99
100	822	37年 7 月	6	考察。西洋文化と「行動」			100
101	822	7 月	4	考察。飢えよりも渴きの方が厳しい			101
102	822		5	考察。チベットのヨガ行者			102
103	822		3	情景。町中の女たち。欲望			103
104	822	8 月	9	体験。パリの路上で発熱を覚える。アルプスでの療養について			104
105	823		6	省察。自己のあり方。執筆。			105
106	823	8 月	4	情景。パリの優しさと風物			106
107	823		1	1 単語「アルル」			107
108	823	37年 8 月	15	情景。毎日の山歩き。風景や自然との対峙。 アンブランにおける療養中の日々に着想を得たものと思われるが、il という三人称体を用い、小説的な表現になっている。作品への利用を考えていたのかもしれない。			108
109	823		1	1 文「サヴォワの優しさ」			109
110	824	37年 8 月	10	小説の構想。突如自らの人生に違和感を感じた男。3 部構成 →『幸福な死』の構想へつながる萌芽と考えられる。			110
111	824	37年 8 月	15	「最終章? パリ-マルセイユ 地中海への南下」という 1 文に 続いて、夜の海で泳ぎ、「世界」との不思議な一体感を覚える 男の描写 →『幸福な死』第2部第3章の最終場面に使用	◎		111
112	824		1	1 文:「二人の登場人物。片方が自殺?」			112
113	824	37年 8 月	5	小説の会話の場面 「演技者」という頭書き。「カトリーヌ」という名			113
114	825		6	小説の構想。「演技者」 →この構想はその後発展しなかった。			114
115	825	37年 8 月	17	小説の構想 3 部構成。A と B の二つのストーリーが交替。第3部は現在形で。 「自然な死」「世界を望む家」「性的な嫉妬」「ギャルソン」など、 その後『幸福な死』に盛り込まれるキーワードが出現	○		115



No.	PL 頁	日付	行数	概 要 ・ 備 考	関連	位置	CaNo
116	825	37年8月	11	考察。「政治的言説」の非人間性に対する批判			116
117	826		7	「第1章A2あるいはA5」 会話の下書き 小説の構想に関連するが、実際の『幸福な死』には用いられなかった	○		117
118	826	37年8月	18	小説の構想 冒頭に「三部構成」とあるが、実際には第1部の構想のみ 現在形を用いたAの系列と、過去形を用いたBの系列が交互に 現れる	○	*	118
119	826		6	小説の構想。I～Ⅲの三部構成だが、118のものと比べると簡素	○		119
120	827		5	小説のためのメモ。「性的な嫉妬」のモチーフ	○		120
121	827		2	小説のためのメモ。ブラハ	○		121
122	827	8月	2	1文「スペイン人に哲学者がいない」			122
123	827		3	小説のためのメモ。『幸福な死』のテーマに関連	○		123
124	827	9月	8	省察。8月中の療養について。創作への思い			124
125	827		1	モンテルランの引用			125
126	827		3	マルセイユについて			126
127	828	9月8日	6	情景。マルセイユのホテル			127
128	828	9月8日 水曜日	11	旅行での省察。モナコからジェノヴァを経てピサに至る。			128
129	828		2	ピサで見つけたイタリア語の落書き			129
130	828-29	9日 木曜日	19	旅の情景。ピサとフィレンツェ。両者の大聖堂前広場			130
131	829		1	一文「画家ゴッツォーリと旧約聖書」			131
132	829		5	考察。画家ジョットについて			132
133	829		2	フィレンツェの教会ごとに咲く花々			133
134	829-30		42	1ページに及ぶ長大な断章 フィレンツェのサンティッシマ・アヌンツィアータを訪れた際の 情景描写と、それにインスパイアされたさまざまな省察。			134
135	830	9月	7	キリスト教に関する考察			135
136	830		1	一文。サンマルコ教会の回廊			136
137	831		5	考察。かつてのシエナとフィレンツェの住民に関して			137
138	831		5	描写。サンタ・マリア・ノヴェッラ教会にて			138
139	831		24	フィレンツェ郊外の町フィエゾーレを訪れた際に靈感にとらわ れて行った省察。「世界」と「我」の関わりについて。 → 後に、エッセイ集『婚礼』に収められた「砂漠」で利用される。	◎		139
140	832	9月13日	3	一文。フィエゾーレでの月桂樹の香り			140
141	832-34	9月15日	86	数ページにわたる長大かつ重要な断章。 フィエゾーレのサン・フランチェスコ修道院を訪れた際の情景 描写に始まり、それにインスパイアされた形で、自然と人間（自 己）の一体化という神秘的な体験に関する省察を綴り、自らの 「生」を振り返り、「幸福」に関する独特な考察へと至る。 → 『幸福な死』の決定的な構想のきっかけとなり、この断章の 文章は同作に利用される。その後、エッセイ「砂漠」で再度活 用される。	◎		141



### 3. 謎の断章群

『カルネ』第1分冊編纂の問題点は、新PL版と旧版との断章の並びかたを比べることです。まず浮かび上がってくる。分析表のNo.とCaNoとを比較すると、新PL版の12が旧版では断章12の前半であり（「12前」とはそういう意味）、新PL版の13は旧版の15に対応していて、以下、両者の版で通し番号が2つずれたまま続く。これは何が原因なのであろうか？

表を追っていくと、次のような対応が見つかる。

新PL版・48 — 旧版・12後

新PL版・49 — 旧版・13

新PL版・50 — 旧版・14

つまり、旧版出版時には断章12だったものが前後に分割され、その後半および断章13、14が、新PL版の断章47（旧版では49にあたる）の直後に移動されているのである。これで通し番号のずれは解消するはずだが、1つの断章が2つに分けられているから、新PL版の方が一つ増え、通し番号のずれは差し引き1つとなる。だが、旧版の断章54と55が新PL版では断章55としてまとめられているために断章数の相違は解消され、断章56以降は、新PL版と旧版で断章の通し番号が完全に一致するようになるのである。

プレイヤッド版の編者は、なぜこのような修正を行ったのであろうか。まず旧版の断章12を前後に分割したことだが、これは本来異なった2つの断章だったのに、旧版の編者が間に「\*」を打つことを怠ったかそれが落丁したか、どちらかと考えられる。両者は内容的にまったく異なっているうえに、前半（新PL版・断章12）が旧版のp.23、後半（同48）がp.24と、ページをまたいでいるからである。したがって、これは特に大きな問題とはならない。

重要なのは、新PL版において3つの断章の位置がまとめて移し替えられたことである。その理由について、同版の注解には次のように記されている。

1936年の1月から11月の間の記述には、明らかに時間的順序のまちがいがある。それゆえ『カルネ』の元の版における24ページから26ページの部分を移し替えねばならない。[中略] この部分は『幸福な死』に関連しているのだが、元の版におけるように、それが1月の日付がある断章の直後に位置するということは、理屈から言ってありえない。いくつかの文章がもっと後になって起きた事柄に関連しているからである（たとえば「性的な嫉妬。ザルツブルク。プラハ」。これは1936年夏にカミュが行った中央ヨーロッパでの旅に関わっている）。したがってこの部分を、時間的順序から言って正しい箇所、つまり1936年11月の記事の直前に置いたのである<sup>7</sup>。

では、問題となっている3つの断章の内容を見てみよう。これらは、小説の構想のための一連のメモであり、断章48は小説第2部のプランとなっている（なぜか第1部のプランはない）。時制を

<sup>7</sup> PLII, pp.1384–85.

現在形にして現在の状況を綴るA群と、時制は過去形にして以前の事柄を物語るB群という、2つのエピソードを交互に展開させるという計画であったようだ。断章49は、おそらくその小説の主人公である「パトリス」という人物が、ものを書くことを心に決め、その内容である死刑囚のエピソードについて別の登場人物に語るという断片であり、続いて第3部の簡単なプランが記されている。断章50は、小説の中に盛り込もうとカミュが考えた6つのエピソードの列挙となっている。当然ながらこれらは後の『幸福な死』へとつながっていく萌芽であるが、この時点では「秘教の修行にも似た幸福の探求」や「自然世界との一体化による幸福な死」という、『幸福な死』の中心テーマはまだ認められない（それらは、1937年9月以降の第2分冊において明確に出現する）。

以下の『カルネ』の断章の引用においては、すべて、【 】内の数字は断章の番号であり、元のテキストにはない。ゴチック体と下線も原文にはなく、わかりやすくするために筆者が施したものである。また断章48～50については、( )内に旧版における番号も付してある。

【48】<sup>8</sup> (旧12後半)

第2部

A. 現在形で

B. 過去形で

第1章A — 世界を望む家。紹介。

B — 彼は思い出す。リュシエンヌとの関係。

第2章A — 世界を望む家。彼の若さ。

B — リュシエンヌが自らの不実を語る。

第3章A — 世界を望む家。招待。

第4章B — 性的な嫉妬。ザルツブルク。プラハ。

第4章A — 世界を望む家。太陽（陽光）。

第5章B — 逃亡（手紙）。アルジェ。風邪を引き、病に倒れる。

第5章A — 星空を見上げる夜。カトリーヌ。

【49】<sup>9</sup> (旧13)

パトリスは、自分が作った死刑囚についての物語を語る。「僕には見えるんだよ、そいつがね。僕の中にいるんだよ。そいつがひとこと語る度に、心がしめつけられる。そいつは生きていて、ほんとにしょに息をするんだ。そいつが怯えたら、僕も怯えるんだ」

「そして、そいつの心を折ろうとするもう一人の奴。奴が活着ているのも見える。僕の中にいるんだよ。死刑囚の心を弱めてやろうと、僕は毎日、その司祭の奴をそいつのもとにやるんだよ」<sup>10</sup>

<sup>8</sup> PLII, p.810. CAI, p.24.

<sup>9</sup> PLII, pp.810–11. CAI, pp.24–25.

<sup>10</sup> 「パトリス」という名前は、『幸福な死』の主人公「パトリス・メルソー」として採用されることになる。

また、作品の最後になって主人公が作家としての定めを自覚するというのは、ブルーストの『失われた時を求めて』からの影響を思わせる。

[中略]

第3部（すべて現在形で）

第1章 — パトリスは言う。「カトリーヌ、僕は今や、ものを書こうとしていることがわかるんだ。死  
刑囚の物語だよ。書くという、僕のほんとうの役割に従うことにしたんだよ。」

第2章 — 世界を望む家から港の方へ下っていく、など。死と太陽の味わい。生きることへの愛。

【50】<sup>11</sup>（旧14）

6つの物語

華麗な賭けの物語<sup>12</sup>。豪奢。

貧しい地区の物語。母親の死

世界を望む家の物語。

性的な嫉妬の物語。

死刑囚の物語。

太陽（陽光）の地へ向けて南下する物語<sup>13</sup>。

特に重要なのは、断章48における「ザルツブルク。プラハ」という記述である。1936年の7月から8月にかけて、カミュと当時の妻シモーヌは、イブ・ブルジョワという友人とともに、オーストリア、ドイツ、チェコを巡る旅に出かけた。その際にさまざまな町に立ち寄ったが、ザルツブルクとプラハがその中に含まれるのである。当時アルジェに住んでいたカミュが、まったくの想像で、はるか離れたオーストリアやチェコの都市を小説の舞台として思いついたということはまずありえず、この部分は1936年夏の旅行に着想を得て記されたはずであり、したがって断章48およびそれに深く関連する49、50の3つは、1936年8月以降に書かれたものだと判断するのが妥当である。

ところが旧版においては、これらは「1936年1月」の日付を持つ断章10と、「1936年2月13日」の日付を伴った断章17の間に位置しており、そのままでは1936年の1～2月にかけて記されたことになってしまう。これではまるでタイムパラドックスであり、従来から研究者たちを悩ませてきた（気づかない研究者も実は多かった）。そこで新PL版の編者は断章の位置の変更を行ったのである。

また、何度も繰り返される「世界を望む家」*la Maison devant le Monde* ということばにも注意したい。これは、アルジェの高台のシーディ・プライム通りにあった家屋のことで、カミュとその友人たちはこの2階を借り受けて自分たちの「たまり場」として活用し、一種の共同生活を送ったの

<sup>11</sup> PLII, p.811. CAI, pp.25–26.

<sup>12</sup> 原文は *Jeu brillant*。他の断章やカミュ作品のモチーフ群の関連から言って *jeu* は「演技」としたいところだが、フランス人のインフォーマント数名に確認した限りでは、*brillant* という形容詞と結びついた場合、*jeu* は「賭け」の意味になるのが通常であるとのことである。

<sup>13</sup> 原文は *Histoire de la descente vers le soleil* であるが、「太陽へ向けて下る」では意味が通らない。1936年の旅の際、カミュは最後にイタリア半島を南下し（その際、精神的な蘇生の体験をした）、さらに陽光にあふれた地中海をわたって太陽の地アルジェリアへと戻った。この一行はその経験に着想を得たものであろう。それゆえ「太陽（陽光）の地へ向けて南下する物語」と訳出した。

だった。その窓からは周囲の山々、アルジェの市街と湾、地中海が一望の下に見渡せたので、彼らはそこを「世界を望む家」と呼ぶことにしたのである。ここで過ごした日々は、カミュの青春時代においてことのほか素晴らしい時間であつたらしく、後の『幸福な死』における第2部第3章で、その日々をあたたく再現している。ところが、カミュたちがこの家を見つけたのは、ハーバート・R・ロットマンによる浩瀚な評伝『アルベール・カミュ』によれば1936年の春（おそらく3月頃）であり<sup>14</sup>、36年2月13日以前に記された断章に「世界を望む家」という記述が現れるのは明らかにおかしい。やはり旧版における3つの断章の位置は正確とは言えないのである。

だが、ここで生じる重大な疑問は、はたして移し替えた先の位置が妥当なものかどうか、であろう。分析表の2ページ目を見ればわかるように、1936年に書かれた断章の日付は、5月（断章44）からいきなり11月（断章51）に飛んでいる。しかも断章44～47は極めて似た性格の文章であり、同じ5月にはほぼ連続して記されたと考えられる。つまり1936年6月から10月にあたる断章はすっぽりと抜け落ちているのである。その理由については後にセクション8で考察するが、新PL版の編者は、「3つの断章は36年8月以降に書かれたはず」ということを理由に、11月の日付を持つ断章51の直前においた。こうして旧版の断章12後～14は、新PL版では48～50という断章になったわけである。

しかしながら、「8月以降に書かれた」からと言って、11月の断章の直前に置くことが、新PL版編者の主張するように「正しい」ということになるだろうか？ 11月の断章の「後に」置こうが、1937年になってからの断章だと考えようが、要するに「断章48～50より後に書かれたはずだ」という断章より前に位置すれば論理的には問題がないはずである。旧版における位置が間違っているのが確実だとはいえ、では新PL版における場所が正確かという点、その根拠はなんら存在しないではないか。謎の断章48～50の本当の位置を確定するためには、より厳密な考察が必要となるはずである。

#### 4. 旅程表の疑問

その解明に移る前に、新PL版の編者が見落としているもう1箇所の疑問について考察を行いたい。それは、1936年夏の旅における旅程を詳細に記した、断章92についてである。

[92]<sup>15</sup>

リヨン

フォアアルベルクーハレ

クーフシュタイン：チャペルと、雨にうたれ、イン川にそった原。孤独が錨を下ろす。

<sup>14</sup> Herbert R. Lottman, *Albert Camus*, Widenfeld & Nicolson (London), 1979 (以下、Lottman (英)と略す), p.107. および、マリアンヌ・ヴェロンによるその仏訳 (Seuil, 1978. 以下、Lottman (仏)と略す), p.121. なお、英語版の原著と仏訳版とでは、注の記載に若干の異同が認められる。

<sup>15</sup> PLII, p.820.

ザルツブルク：『イエーダーマン』。サンクト・ペーター教会の墓地。ミラベル宮殿の庭園とその見事な成就。雨，フロックスー湖と山—高台を歩く。

リンツ：ダニューブ川と労働者街。医師。

プトヴァイス：大通り。ゴチック様式の小さな修道院。孤独。

プラハ：最初の4日間。バロック様式の修道院。ユダヤ人墓地。バロック様式のいくつかの教会。料理店に着く。空腹。金がない。死人。酢漬けのキュウリ。アコーデオンに腰を下ろした腕が不自由な男。

ドレスデン：絵画。

バウツェン：ゴチック様式の墓地。レンガ造りのアーチの中に咲いているゼラニウムとひまわり。

ブレスロー：霧。いくつかの教会と工場の煙突。この町に特有な悲劇的な様子。

シレジアの平原：非情で恩知らずな。一砂丘—ねっとりとした朝，粘りつく大地の上を鳥たちが飛ぶ。

オルミュッツ：モラヴィアの優しく，ゆったりとした平原。酸っぱいプラムの木々と，心を揺さぶる遠景。

ブルノ：貧しい地区。

ウィーン —文明—寄り集まった豪華さと，保護してくれる庭園の数々。内なる悲嘆が，この絹の襷のあいだに隠れている。

分析表にあるとおり，断章92は，7月（1937年）の日付がある断章85と，やはり7月の日付が付いた断章95の間に位置している。したがって1937年7月に記されたことになるのだが，1936年7～8月における旅程を，わざわざ1年経ってから書きとめるものだろうか？ さらに，単なる地名の列挙ではなく，最近体験したばかりのような具体的な描写が続いているのである。

しかも断章92は明らかに，カミュが出版した最初の作品であるエッセイ集『裏と表』*L'Envers et l'endroit*所収の「魂の中の死」*«La Mort dans l'âme»*と深い関わりがある。このエッセイは，36年夏の旅行の後半，プラハからオーストリアを経てイタリアに至る旅における体験と内的省察を題材として書かれているのだが，その中の描写は，この断章におけるメモを出発点としている可能性が極めて高いのである。

プラハについてまだ覚えているのは，街角という街角で売られており指でつまんで食べる，あの酢漬けのキュウリの匂いだった。ホテルの扉をまたいで外に出るやいなや，その鋭く突き刺すような匂いのせいで僕の不安が呼び覚まされ，ふくれあがるのだった。そしてたぶん，アコーデオンのとあるメロディーも覚えている。部屋の窓から下を見ると，目の見えない腕の不自由な男が，アコーデオンに腰を下ろし，片方の尻と自由の利く方の手でそれを支えているのだった。<sup>16</sup>

それからすぐ，僕はプラハを発った。そして確かに，その後目にしたものに関心を持ったのだ。バウツェンの小さなゴシック様式の墓で過ごしたあのような時間，そこに咲いていたゼラニウムのまばゆい赤，そして青い朝について，語ろうと思えば語れるだろう。シレジアの長々と続く，非情で恩知ら

<sup>16</sup> PLL, p.58. 引用文が長大になりかねないので省いたが，断章92における「バロック様式の修道院」「料理店」「金がない」「死人」というトピックも，「魂の中の死」に明確に登場している。

ずな平野について、語れるだろう。僕は朝早くそこを通ったのだ。霧が立ちこめるねっとりとした朝、粘りつく大地の上を、鳥たちが重々しく飛んで行った。優しく、ずっしりとしたモラヴィア、その澄んだ遠景、酸っぱい実を付けたプラムの木々で縁取られたその道々も、気に入ったのだ。<sup>17</sup>

下線部は原文ではなく、筆者が補ったものであるが、断章92と完全な対応を示しており、92のメモが元となってこれらの文章が書かれたと考えるのが自然であろう。ところが、『裏と表』が出版されたのは1937年5月10日であり、当然ながら「魂の中の死」はそれより以前に執筆されたのであって、それに利用されたメモが37年7月の時点に置かれるはずはないのである。

もし断章92が本当に37年7月に書かれたものならば、カミュはいったん完成させ出版まで行った作品から、わざわざその一部分を抜き出して、1年前に行った旅の旅程表を記したということになる。そのようなおかしな作業がありうるだろうか？ それよりも、断章92は実際には36年夏の旅の後、「魂の中の死」の執筆よりも前に記されたのだが、断章48～50と同様に本来あるべきではない位置に印刷されていると考える方が、ずっと自然ではなかろうか<sup>18</sup>。しかしながら新PL版の編集者は断章92の持つ不自然には気が付かず、旧版と同じ位置に置いたままにしているのである。

位置に疑問が生じる断章としてはもう一つ、断章22(旧版の24)を挙げておく必要がある<sup>19</sup>。これはある日の散策の描写と、その光景にインスパイアされた内的な省察が一体となっている文章だが、旧版では「5月16日」の日付が付いている。ところが、22の前後には「3月」の日付を持つ断章がいくつもあり、本来ここは1936年3月頃に書かれたものが置かれるはずなのである。実際には5月に書かれた断章がこの位置に移動してしまっているのだろうか、それとも、「3月 Mars」という単語を「5月 Mai」と旧版の編者が読み間違えたのであろうか？<sup>20</sup> 客観的な決め手はないが<sup>21</sup>、新PL版の編者は後者だと判断したのか、「5月」を「3月」に改めている。ただし、これについては特に注記がない。旧版をわざわざ改めたのだから、一言記しておいてしかるべきであろう。

## 5. 小説への道

断章48～50が占めるべき本来の位置を検討する上で最も重要な点は、これらが、生前未完に終わったカミュの処女小説『幸福な死』の初期の構想と深く関わっているということである。したがって、『幸福な死』のアイデアがいつごろ浮かび、そのプランが練られるようになったかを見極めれば、この3断章が占めるべき位置が絞り込まれることになる。

カミュは創作に手を染めたごく若い頃から、自らの幼少年期の体験に基づいた自伝的な作品を手

<sup>17</sup> PLI, p.60.

<sup>18</sup> したがって、断章92は、断章51の直前に置くのが適当であると考えられる。

<sup>19</sup> PLII, p.803. CAI, pp.30–31.

<sup>20</sup> カミュは生前に『カルネ』をタイプ原稿にさせていたそうなので、タイプの打ち間違いかもしれない。

<sup>21</sup> 情景描写から言って春先のイメージが強く、3月の記事である可能性が高い。アルジェリアの5月は、もはや初夏に属するからである。



がけたいと考えていた。その第1の果実が1934年12月25日の日付を持つ「貧しい地区の声」《Les Voix du quartier pauvre》というエッセイであり、カミュはその手書き原稿を、おそらくはクリスマスプレゼントとして、結婚したばかりの妻シモーヌに捧げている。その後、「貧しい地区の声」の素材や文章の一部が、『裏と表』所収のエッセイ「皮肉」に用いられることになる。

他方、カミュ研究の大家ジャクリヌ・レヴィ＝ヴァランシによれば、1934年から36年にかけてカミュは小説の試みに取り組んでおり、レヴィ＝ヴァランシは主人公の名前を取ってその幻の作品を『ルイ・ランジャール』*Louis Raingard*と名付け<sup>22</sup>、これがカミュの作家としての出発点であると位置づけている。しかしながらレヴィ＝ヴァランシが再構成してプレイヤッド新版に資料として収めたその原稿は、ページ数にして10ページあまりに過ぎず、小説としての構成もほとんど認められない、いわば下書きに過ぎない<sup>23</sup>。これをカミュの「処女小説」と捉えるのには無理があるだろう。また、『ルイ・ランジャール』の原稿のかなりの部分が、「貧しい地区の声」のテキストの再利用からなっている。

『ルイ・ランジャール』の原稿を放棄した後、カミュは次の創作へ向けて逡巡していたと思われる。他方で、1935年の後半からカミュは素人劇団による演劇活動に熱心に取り組むようになり、そちらに創造的エネルギーを取られたという事情もあっただろう。そして先にも見たように、1936年夏の旅の後、おそらくは10、11月頃から翌37年の2～3月頃にかけて、『裏と表』に収められた5本のエッセイを書き上げたのだろう。

こうした時期の確定の根拠となるのが、37年4月の日付を持つ断章65である。

【65】<sup>24</sup>

4月

女たち — 自分たちの感性よりも考えの方を好む。

— 廃墟についてのエッセイのために

乾燥をもたらす風 — サヘルに生えるオリーブと同じくらいにむきだしになった老人。

1) 廃墟についてのエッセイ：廃墟を吹く風、あるいは陽光にさらされた死。

2) 「魂の中の死」を再び取り上げること — 予感。

3) 世界に向かう家

4) 小説 — それに努力を傾けること。

5) マルローについてのエッセイ

6) 論文

<sup>22</sup> 「ランガール」*Raingard*と書かれている部分もあるが、おそらくカミュの誤記であろう。「ランジャール」という姓は珍しいものとはいえフランス人の間に認められるが、「ランガール」は確認できない。

<sup>23</sup> PLI, pp.86–96. なお筆者は、カミュは1935年中に『ルイ・ランジャール』の執筆をあきらめたのではないかと考えている。

<sup>24</sup> PLII, pp.814–15.



「魂の中の死」を再び取り上げる」というからには、このエッセイはすでに書き上げられていて、それをもう一度推敲する、ということであろう。「廃墟についてのエッセイ」というのは、明らかに、その後第二エッセイ集『婚礼』*Noces* (1939) に収められることになる「ジェミラの風」*«Le Vent à Djémila»* を指している。「世界に向かう家」については、1月の日付を持つ断章55によれば、それを題材としたエッセイが計画されていた<sup>25</sup>。またマルローに関するエッセイもこの断章65で計画されている。「世界に向かう家」とマルローについてのエッセイは結局書かれることがなかったが、このように新しいエッセイの執筆予定が立てられているのは、「魂の中の死」以外の4本のエッセイもすでに書き上げられていることの証左となるはずである。

そして4) に記された「小説 roman」という単語に着目したい。実は、カミュが明確に roman という単語を用いてそれに取り組むと記したのは、『カルネ』においてはこの断章65が初めてなのである<sup>26</sup>。例外的に冒頭の断章1には小説のテーマやプランとおぼしき記載があるが<sup>27</sup>、roman の語は用いられていない。断章11には単語 roman が現れるが、それはカミュが考えた「イメージでしか物は考えられない。哲学者たらんと欲すれば小説を書くべし」という箴言で用いられているものであり<sup>28</sup>、具体的な創作計画とはなんら関わりがない。つまり断章65は、カミュが「小説」という単語を明確に用いてその執筆意欲を記した最初の記事なのである。

一方、断章2からここまでを通覧するならば、小説の構想に関する記述が一切認められないことがわかる（問題となっている断章48～50は当然省かれる）。以上から、『ルイ・ランジャール』の計画を放棄したカミュは、しばらくの間は（おそらく1年以上）エッセイの執筆と演劇活動に打ち込んでいて、具体的に小説の計画を立てることがなく、この37年4月に至って、改めて小説への意欲をかき立てたのではないかと結論づけることができるだろう。したがって、プレイヤッド版の編者が考えたように断章48～50を1936年11月の断章の直前に置くことは適切とはいいがたい。明らかに、1937年4月より後の時期に据えるべきなのである。

## 6. 模索の日々

続いて、65以降の『カルネ』の断章から、小説の構想に関すると考えられるものを探し、4月に考えた「小説を書く」という目標をカミュがどのように実現させようとしたかを検討していこう。まず6月の日付を持つ断章73に「死刑囚のもとを司祭が訪れる」というエピソードがあり、これは後の『異邦人』の設定を想起させるが、当然ながらこの時点でカミュが『異邦人』を着想してい

<sup>25</sup> PLII, p.813.

<sup>26</sup> 筆者は、カミュが書いたほぼすべてのテキストをスキャナで読み込み、OCRソフトで処理して、カミュテキストのデジタルデータを作成してある。そのデータを用いて検索すれば、単語の使用頻度や使用状況はただちに判明するわけである。

<sup>27</sup> PLII, pp.795–76. これらは、『ルイ・ランジャール』に関連するものと推定される。

<sup>28</sup> «On ne pense que par image. Si tu veux être philosophe, écris des romans.» PLII, p.800.

たとえることはできない。小説のための素材を漠然と考えてみた、という程度であろう<sup>29</sup>。ついでやはり6月に記されたと考えられる断章82は<sup>30</sup>、マルセルという人物が、第一次世界大戦におけるマルヌの戦いで体験した凄惨な戦場のありさまについて語る場面である。これは若干修正を施されただけで、後の『幸福な死』の第1部第2章の素材として用いられた<sup>31</sup>。しかしこれも、この時期にカミュが『幸福な死』を具体的に構想していたという直接の証拠にはならない。やはり断章73同様、そのころ漠然と思いついたさまざまな小説としての素材の一つとして捉えるべきである。

7月に入ると「〈いかなる関わりも持たない〉 真の小説」という記述で始まる断章86が見つかるが、これも具体的な構想には結びつかない<sup>32</sup>。それよりも断章90に着目したい<sup>33</sup>。「プラハ。自分からの逃走」という表記の後に、プラハのホテルで部屋を頼む男とフロント係の対話が続くのである。これはほぼそのまま、『幸福な死』第2部第1章の冒頭で用いられることになる<sup>34</sup>。また続く断章91の「列車の中で自分の両手を見つめる男」についての短い描写も、第2部第2章の冒頭の文章と関わりを持つ<sup>35</sup>。この頃カミュは、「魂の中の死」でいったん取り上げた1936年夏のプラハ体験を、もう一度小説の素材としてはどうか考えたのであろう。それを示唆するのが、「4. 旅程表の疑問」で取り上げた断章92がまさにこの直後に続いているという事実である。プラハを小説の素材とすることを思いついたカミュは、その体験を生き生きと思い出そうと以前に書きとめた断章92に目をやり、それを切り抜いて90、91の直後に持ってきて貼り付けたのではなかろうか？<sup>36</sup>

続いてカミュは、「演技者 *joueur* についての小説」というテーマを思いつき、それについて断章98と99に記している<sup>37</sup>。フランス語の *jeu* および *joueur* という単語は極めて多義的であって、*joueur* は「演技者」とも「賭博者」とも訳すことができるのであり、これらの断章においても訳出の決め手はない。とはいえ「演技」というテーマは『幸福な死』の中にわずかではあるが姿を見せるし、戯曲『カリギュラ』と『誤解』においては中心的なテーマとして位置づけられることを指摘しておきたい。

<sup>29</sup> PLII, p.816. また、このエピソードは先に検討した断章49と50における「死刑囚の物語」を想起させる。では断章73は断章49の内容を再び取り上げたものであろうか？ このあと明らかにするように、事実は逆であって、まず断章73の時点でカミュは初めて小説の題材として「死刑囚」を着想し、それを断章49・50に盛り込んでいったのである。

死刑囚のエピソードは、結局『幸福な死』に盛り込まれることなく、いわば手つかずのモチーフになった。それをカミュは後年『異邦人』のために再び取り上げることになるのである。

<sup>30</sup> PLII, p.818.

<sup>31</sup> *La Mort heureuse*, PLI, pp.1110–11. これは若きカミュが知人などから実際に聞いた話に基づくエピソードであろう。なお『幸福な死』においては、この話を語るのは主人公メルソーの友人エマニュエルになっている。

<sup>32</sup> PLII, p.819.

<sup>33</sup> PLII, p.819.

<sup>34</sup> PLI, p.1138.

<sup>35</sup> PLI, p.1147.

<sup>36</sup> 『カルネ』のノートでページの差し替えが行われた理由については、後述のセクション8を参照。

<sup>37</sup> ともにPLII, p.821.

1937年7月末から9月半ばにかけてカミュは、友人たちとともに、持病の結核の療養もかねて、フランスとイタリアへの長い旅行に出かける。最初に南仏のサヴォワに滞在し、ついで初めてパリを訪れた後、再び南仏へ下って山岳地帯のオート＝アルプ県にある小さな町アンブランでしばらく過ごす。最後に、別の友人たちと合流して、ピサとフィレンツェを巡ることになる。そして、アルジェにおける日常を離れてじっくりと自己省察を行う時間が取れたことと、旅先の光景からのさまざまな知的感覚的刺激とがあいまって、この旅行の間に、小説の構想がようやくカミュの中で形を取るようになったのである。

8月、アンブランでの滞在中に記された断章には、立て続けに作品の着想に関する記述が現れる。まず断章110には、自らのそれまでの人生に違和感を覚えた男の物語について、3部構成で書こうというアイデアが書きとめられる。これは、断章98・99における「演技者についての小説」を発展させたものであろう。

【110】<sup>38</sup>

37年8月

ある男が、ふつう考えられるよう形の人生（結婚、職業、など）を追い求めていたが、とつぜん、モードのカタログをめくりながら、自分がそういう人生（モードのカタログの中で考えられるような人生）とはどれほど無縁な人間なのかに気が付く。

第1部：それまでの男の人生

第2部：演技

第3部：妥協の放棄と、自然に囲まれての真実

旧プレイヤッド版の編者ロジェ・キヨがこの断章を「『異邦人』の出発点」とあやまって位置づけたことに端を発し<sup>39</sup>、しばらくのあいだそのような説が流布したが、「死刑囚のエピソード」同様、『幸福な死』の構想や執筆より以前に『異邦人』の具体的な着想を求めることはできない。むしろ自然の中で真実を求めるというテーマは、『幸福な死』の方へとつながっていく。また、ここで小説を3部構成にするというアイデアが生まれていることは重要である。『幸福な死』は最終的に二部構成となったが、当初は三部構成として着想されていたからである。

続く断章111では、「最終章？ パリ マルセイユ 地中海への南下」という冒頭の1行に続き、夜の海で一人泳ぐ男が、自然との合一という神秘的体験を覚える姿の描写が記されており<sup>40</sup>、おそらくは小説の1場面として着想されたのであろう。そしてカミュはその後、この描写をわずかに書き換えて、『幸福な死』第2部第3章の末尾で、主人公パトリス・メルソーとその女性の友人たちが「世界を望む家」において、夜空を前にして自然との不思議な一体感に浸るシーンに用いること

<sup>38</sup> PLII, p.824.

<sup>39</sup> プレイヤッド旧版における『異邦人』の注解。PLT., p.1915.

<sup>40</sup> PLII, p.824.

になる<sup>41</sup>。「夜が星々にあふれるこのとき、彼の（→彼らの）動きは空の黙り込んだ大きな顔に沿って描かれるのであった…」

断章113は「演技者」という表記に続いて主人公とおぼしき人物とカトリーヌという登場人物の短い会話が記されている<sup>42</sup>。「カトリーヌ」は『幸福な死』の登場人物の一人であるが<sup>43</sup>、この会話は作品には利用されていない。114も「演技者」という表記を持ち小説の構想に関わるが<sup>43</sup>、『幸福な死』には利用されなかった。

そして断章115において、ついに、『幸福な死』となるべき小説の初期の構想がその全体像を現す。3部構成が明確に示され、現在形で叙述するA群と過去形で記されるB群の交替というアイデアが生まれる。断章110における「成功を求めるありきたりの人生には無縁だと自覚した男」というテーマは削除され、代わりに、断章50で列挙された「6つの物語」のうち、「太陽の地へ向けての南下」「世界を望む家」「性的な嫉妬」の3つがここで姿を見せる。また「貧しさ *pauvreté*」という単語も、「貧しい地区の物語」との関連を思わせる。他方、その後『異邦人』における大きなテーマとなる「母親の死」のアイデアがここで初めて記されていることも注目される。ただし、実際に執筆された『幸福な死』においては、「母親の死」のテーマは最終的に小さなエピソードに縮小する結果となる。

【115】<sup>44</sup>

37年8月

小説のプラン。演技と人生を結びつけること

第1部

A—自分からの逃避

B—M.と貧しさ<sup>45</sup>。（すべて現在形で）Aの系列の章は、演技者を描く。Bの系列の章は、母親の死までを描く。（マルグリットの死—さまざま仕事：仲買、自動車の付属品、県庁、など）

最終章：太陽の地へ向けての南下と死（自殺—自然な死）

第2部

逆にする。Aは現在形で：喜びの再発見。世界を望む家。カトリーヌとの関係。

Bは過去形で。むきになる。性的な嫉妬。逃避。

第3部

すべて現在形で。愛と太陽。「ちがう」とギャルソンが言う。<sup>46</sup>

この後の断章117には「第1部のA2あるいはA5」という表題の元に、小説のための描写らしき文章が記されているが、これは実際の作品で用いられることがなかった。

<sup>41</sup> PLI, p.1116.

<sup>42</sup> PLII, p.824.

<sup>43</sup> PLII, p.825.

<sup>44</sup> PLII, p.825.

<sup>45</sup> 「M.」は主人公のイニシャルだと考えられる。『幸福な死』においては主人公の姓がメルソー Mersault となる。

<sup>46</sup> 「ギャルソン」は『幸福な死』においてメルソーのあだ名として用いられる。

## 7. 断章48～50の本当の位置

このように、『カルネ』の断章を通じて小説の構想を巡るカミュの模索を検討していくと、重要な謎となっている断章48～50は、新PL版の編者が考えたような「1936年夏以降11月までの間」ではなく、実は小説について集中的な思索が行われた1937年の8月の時期に記されたのではないかと、という結論が浮かんでくる。これをはっきりと裏付けるのが、断章118であろう。

【118】<sup>47</sup>

37年8月

プラン。3部構成。

第1部 A. 現在形で

B. 過去形で

第1章A — 外側から見たメルソー氏の日。

B — パリにある貧しい地区<sup>48</sup>。馬肉屋。パトリスとその家族。口の利けない男。祖母。

第2章A — 会話と逆説。グルニエ。映画

B — パトリスの病気。医師「この発作のピークは...」

第3章A — 巡回劇団の一ヶ月。

B — 仕事（仲買、自動車の付属品、県庁）

第4章A — 大いなる愛の物語「一度もそれを感じたことはありませんの？ — ありますよ、奥様。あなたを前にして」拳銃のテーマ

B — 母親の死

第5章A — レエモンドとの出会い

ここでは断章115の「第1部」の部分がさらに拡充され、「馬肉屋、口の利けない男、祖母、主人公の病気」といった自伝的要素が深まっている。リセ時代のカミュの恩師であった「グルニエ」の名前まで登場し、35年の末以来カミュが打ち込んできた素人劇団の活動への言及もある。

しかし、大きな疑問となるのが、「3部構成（3 parties）」と明示されているにもかかわらず第1部の構想しか記されていないことである。断章110、115と三部構成を発展させてきたのに、どうして第2部第3部について書かれていないのか？ しかも、直後の断章119には、次のようにまた三部構成が示されているのである。「第1部 A — 性的な嫉妬 B — 貧しい地区 — 母親」「第2部 A — 世界を望む家 — 星々 B — 横溢する生」「第3部 A — 彼が愛さないカトリーヌ」<sup>49</sup>

そこで、断章48と49を振り返ってみよう。第1部を抜きに（「3部構成」という表記も無しに）いきなり第2部の構想が記され、続いて第3部について書きとめられている。これらを断章118の

<sup>47</sup> PLII, p.826.

<sup>48</sup> Quartier pauvre de Paris とあるが、都市名ではなく、「パリ通り」の意味ではなかろうか。旅行で訪れただけのパリを自伝的な題材の舞台とするのは不自然すぎるうえに、幼少年期のカミュが暮らした家はアルジェの「リヨン通り」にあり、これをもじって「パリ通り」とした、という可能性があるからだ。

<sup>49</sup> PLII, p.826.

直後に、というよりも断章118の一部として移動させて接続すれば、3部構成のプランがみごとに完成するではないか。しかも118の第1部と48の第2部の書式を比べるなら、まったく同一であり、この両者が続けて書き記されたと考えるのが自然なのである。3つの断章はまとめて移動されたであろうから、断章50も118の後に置くのが適切だと考えられる。(分析表において断章118の「位置」の部分に「\*」の記号をつけておいたのは、このように、118が特別な断章だからである)

以下に、原文を用いて断章118、48、および49の末尾という順番で並べてみよう。この3者の継続性が明確になるはずである。

## 118

*Août 37.*

Plan. 3 parties.

I<sup>re</sup> partie : A au présent

B au passé.

Ch. A1 — Journée de M. Mersault vue par l'extérieur.

Ch. B1 — Quartier pauvre de Paris. Boucherie chevaline. Patrice et sa famille. Le muet. La grand-mère.

Ch. A2 — Conversation et paradoxes. Grenier. Cinéma.

Ch. B2 — Maladie de Patrice. Le docteur. « Cette extrême pointe.. »

Ch. A3 — Un mois de théâtre circulant.

Ch. B3 — Les métiers (courtage, accessoires automobiles, préfecture).

Ch. A4 — L'histoire du grand amour : « Vous n'avez plus jamais éprouvé ça ? — Si, madame, devant vous. »

Thème du revolver.

Ch. B4 — Mort de la mère.

Ch. A5 — Rencontre de Raymonde.

## 48

II<sup>e</sup> Partie

A. au présent

B. au passé

Ch. A1 — La Maison devant le Monde. Présentation.

Ch. B1 — Il se souvenait. Liaison avec Lucienne.

Ch. A2 — Maison devant le Monde. Sa jeunesse.

Ch. B2 — Lucienne raconte ses infidélités.

Ch. A3 — Maison devant le Monde. Invitation.

Ch. B4 — Jalousie sexuelle. Salzbourg. Prague.

Ch. A4 — Maison devant le Monde. Le soleil.

Ch. B5 — La fuite (lettre). Alger. Prend froid, est malade.

Ch. A5 — Nuit devant les étoiles. Catherine.



III<sup>e</sup> Partie (tout au présent)

Chap. I. — Catherine, dit Patrice, je sais que maintenant je vais écrire. Histoire du condamné à mort. Je suis rendu à ma véritable fonction qui est d'écrire.

Chap. II. — Descente de la Maison devant le Monde au port, etc. Goût de la mort et du soleil. Amour de vivre.

仮に断章48～50が『カルネ』旧版におけるように1936年1～2月に書かれたり、新PL版の編者が考えたように36年の夏以降11月までのあいだに記されたりしたのであれば、カミュは小説の構想についてまず第2部から始め、それから1年半あるいは半年以上経ってから第1部の着想を得たということになってしまう。そのような不自然なことがありうるだろうか？

あるいは逆に、1936年に第1部から第3までまとめて記されていた構想のうち、第1部に当たる部分だけが外されて断章118の部分に置かれた、ということがあるだろうか。セクション6で詳しく見たように、カミュは1937年8月に入ってから小説の三部構成を着想し、それを次第に膨らませていったということ、および断章118には「37年8月」という日付が明確に記されていること、この2つの理由から、そうした逆の仮説も成り立ちはしない。

このように、断章48～50は実際には118に続く形で書かれたにもかかわらず、なんらかの事情により36年1月～2月の部分に移されてしまい、『カルネ』旧版はそれに疑問を感じることなくそのまま印刷を行ったと考えられるのであり、その誤りを指摘した新PL版の編者も、綿密な考証を欠いたがゆえに、本来のあるべき位置に戻すことができなかったのである。

## 8. 第1分冊における改竄の経緯

それでは、このような『カルネ』の旧版における編集ミスの原因はどのようなものであろうか？ むろん、編者のロジェ・キヨが意図的に行ったことでありえない。彼は、旧版『カルネ1』の冒頭に次のように記している。

1935年から1953年の間の分については、カミュはタイプ原稿を作らせるように気を配った。元の手書きノートと（このタイプ原稿を）比べると、カミュは元のノートのものにほとんど手を加えなかったということがわかる。<sup>50</sup>

つまり、第1分冊における改編はオリジナルの手書きノートの上で施されていたのであり、キヨはタイプ原稿だけではなくそのオリジナルも参照したのだが、不注意にも改編の事実には気が付かなかったということになる。一方、仮にタイプ原稿で改編されていたのならばカミュ以外の他人の手

<sup>50</sup> CAI, p.7. したがってタイプ原稿が作られたのは第7分冊までであり、第8および最後の第9分冊は手書きノートしか残されていなかった。



になるものという可能性が生じるが、オリジナルのノートが作り替えられていたのだから、それはカミュ自身が意図的に行ったものであると判断せざるを得ない。さらにそうした歪曲に沿ってタイプ原稿が作られても放置したのであるから、ノートの改竄についてのカミュの決意はかなり強固なものであったと推測される。

なぜカミュはこのような行為を行ったのであろうか？ それを解き明かす糸口となるのが、分析表の2ページ目を見ればわかるように、1936年6月から10月までの間の断章が一つも残されていないという事実である。本当にこの期間に何も書かれなかったのであろうか。この年の夏には中央ヨーロッパの長い旅を行ったというのに、その旅の途上で何もノートに記さなかったというのはあまりに不自然ではなからうか（分析表の後半にある通り、翌1937年夏の旅行に際しては極めて詳細に旅先での情景や折りに触れての省察を詳しく書き込んでいるのである）。事實は、この部分においてこそカミュは最も大がかりなノートの改竄を行ったのではなからうか。つまり、7～8月の旅における記述を中心に、36年6月から10月にあたる部分の断章を丸ごと削除したという可能性が極めて高いのである。

36年7月初めにアルジェを發ったカミュ、妻シモーヌ、カミュの友人のイヴ・ブルジョワの3人は、断章92の旅程表にあるように、リヨンを経由してオーストリアに入り、クーフシュタイン、ベルヒステガーデンを経て、7月下旬にザルツブルクへと至る。この音楽の都でカミュは、衝撃的な事件に遭遇するのだ。ある朝、局留めで送ってもらっていた郵便物を受け取りに郵便局に赴いたところ、妻シモーヌ宛の手紙があり、彼はそれを開封してしまった。送り主はある医師で、シモーヌに麻薬を提供してもよい旨が書かれており<sup>51</sup>、さらに、その男とシモーヌが医師と患者を超えた関係であることが読み取れたのである<sup>52</sup>。

この出来事により、カミュとシモーヌの間には修復不可能な亀裂が入った。また、妻に裏切られたという衝撃は彼の内面に深く突き刺さり、この時に覚えた嫉妬と苦悩はトラウマとなって生涯カミュにつきまとうことになるのである。それでもカミュは旅行を打ち切ることなく続けたのだが、精神的に無理を重ねたためか、プラハでは極度の抑鬱状態に落ち込んでしまう。その時の暗鬱な心象風景に基づいて後に書かれたのが、エッセイ「魂の中の死」である。

断章115、48、50と引き続いて「性的な嫉妬」というアイデアが現れるのは、1年の冷却期間をおいてから、この時の衝撃を小説に描き出し昇華することで乗り越えようという意図に基づくものであろう。それゆえ、断章48に記された第2部の第4章Bの計画において「性的な嫉妬」が「ザルツブルク、プラハ」という地名と結びつけられているのである。だがその後、小説の中心テーマは、題名そのものが物語っているように「幸福な死へと至る探求」へと発展していき、それに反比例するように、「性的な嫉妬」のモチーフは縮小されて、『幸福な死』第1部第3章における、メルソーの恋人マルトを巡る挿話に用いられるだけになってゆく。

<sup>51</sup> シモーヌは麻薬の依存症であつたらしい。カミュは結局、妻をそこから救い出すことができなかった。

<sup>52</sup> ロットマン、pp.114–115（英）、pp.128–129（仏）。

だが、ザルツブルク以降に書かれた『カルネ』第1分冊のノートには、この苦悩と嫉妬の思いが生々しい形で書き込まれていたに違いない。また、ザルツブルク以前の旅での記述も、結果的にそうした苦悩を想起させるものとしてカミュの目に映じたことであろう。さらには、旅の前や後の記述であっても、シモーヌに言及したり、シモーヌの名が記されていたりした断章は、読み返すのに辛いものであったはずである。こうした事情から、後になってカミュは、第1分冊の6月から10月にあたるページを切り取って廃棄したのではなかろうか。最も近い存在であった妻シモーヌ Simone の名前が『カルネ』第1分冊の中に一箇所も見当たらないというのは、極めて示唆的な事実であろう<sup>53</sup>。

実は、『カルネ』の手書きノートにあたることができたロットマンは、評伝『アルベール・カミュ』において、早くも1978～79年の時点で次のように指摘していたのである。しかしこの指摘に注目をしたフランス人研究者は、筆者の知る限り一人もおらず、新PL版における『カルネ』の編者も、ロットマンの評伝にはほとんど注意を払っていない。

（『カルネ』の）第1ノートの原稿は、切り抜かれたり、まとめられたり、あいだに別のページが挟み込まれたりしている。おそらく内的にすぎる省察が含まれていて、それが自分のノートにはふさわしくないと、後になってカミュは判断したのであろう<sup>54</sup>

断章92が本来あるべき位置から外されて別の場所に挿入・添付されてしまったのは、6月～10月分のページを切り取る作業のさなかだったのであろう。36年の旅行に関する記述をすべて廃棄しようとしたカミュは、断章92の旅程表だけは記録として残そうとして別扱いをしたのではなかろうか。

だが、翌37年の8月に記されたはずの断章48～50までをどうしてカミュが移動させたのか、それも1936年1～2月の時点というとんでもない位置にしたのか、という点は非常に不可解である。あやまってこの場所にはさみこんだのならば、タイプ原稿を作成させる際に訂正したはずであり、この改竄も意図的なものと考えざるを得ない。

断章48と50に「性的な嫉妬」のテーマが現れているのが我慢できずいったんページをはがしたものの、資料として残しておくべき重要な文章だと考え直して別の場所に貼り付けたのだろうか。だがそうすると、やはり「性的な嫉妬」と書き込まれている断章115が手つかずのままであることを説明が付かない。

あるいは、若きカミュには『幸福な死』の着想を得たのが実際よりも早い時点であると見せかけ

<sup>53</sup> それどころか、『カルネ』の9冊のノートを通じて、妻を指すものとして Simone の名が現れるのはわずか1箇所、第8分冊において『最初の人間』の構想を記した断章の中でだけなのである（PLIV, p.1215）。

ただし、第1分冊の断章27（PLII, pp.804-05.）において「一緒にいた若い娘」と記されているのは、シモーヌを指している可能性がある。これはアルジェの高台における療養所での話であり、実際にシモーヌは高台にあるベン・アクルン病院というところで治療を受けていたからである。

<sup>54</sup> 第7章の注。p.689（英）、pp.99.（仏）。

たいという背伸びをした願望があって、構想の一部を本来よりもずっと前の時点に移し替えたのだろうか？ 第2部が先に来るという矛盾が生じてしまうが、第1部のプランを記した断章826には「37年8月」という明確な日付があるからそちらを移動させるわけにはいかなかった、ということなのだろうか？

残念ながら、現時点ではこの疑問に答えるすべを見つけないことができない。

残る疑問としてはもう一つ、断章92、48～50以外にも本来の位置から移された断章はないのか、という問題がある。その疑念が残るものとして、Mという人物の自殺願望について描写した断章28を挙げておきたい。

**[28]** <sup>55</sup>

M. 彼は毎晩その武器をテーブルの上に置くのだった。仕事を終え、書類を整理すると、その拳銃を引き寄せ、それを額に押しつけ、こめかみでぐりぐりと回し、その鉄の冷たさで頬の熱を冷ますのだった。そして長いことそのままのままでいるのだ。撃鉄に沿って指をすべらせ、安全装置をもてあそぶのだった。それが終わるのは、世界が自分の周りで黙り込み、早くもまどろみを覚えながら、自分の存在の全てが、冷たく塩辛い鉄、死が飛び出してくるかもしれない銃身の感覚のうちに身を丸めてしまってからのことだった。[略]

このテキストは、若干の修正を施されただけで、『幸福な死』第1部第4章において、ロラン・ザグルーという脚の不自由な資産家が自らの自殺願望をメルソーに対して語るシーンに用いられることになる<sup>56</sup>。だが、この断章28が位置しているのは1936年3月の時点にあたる場所であって、その他の『幸福な死』に用いられることになるテキストが全て1937年6月以降であるのと比べると、あまりに時間的にかけはなれている。また、36年3月の時点でカミュが「M」で始まる名を（例えば「メルソー」）登場人物の名前として早くも思いついていたというのも、不自然ではなかろうか。他にイニシャル「M」が現れるのは、先に検討した断章115だけなのである。以上から、この断章28にも、1937年8月に他の『幸福な死』に関連する断章と一緒に記されたものがその後移し替えられたのではないか、という可能性が生じるのである。

## 9. 断章の位置が持つ問題点

では、こうした『カルネ』第1分冊の改竄・改編は、カミュ研究においてどのような問題をもたらしたのであろうか。第一には、1936年6月～10月の部分の記述が失われたことにより、この間におけるカミュの内的省察の流れが終えなくなってしまったということが挙げられよう。だが第二の、そしてより重要な問題は、『幸福な死』の着想の仮定を正確に終えなくなってしまう、研究に混乱を引き起こした、という点である。

<sup>55</sup> PLII, pp.805–06.

<sup>56</sup> PLI, p.1131.

作家というのは、書くことを通じてしか作家としての自分を形成することができず、また、執筆を重ねることによって自らを絶えず変容させていく、という存在である。とりわけ最初に完成させた作品というのは、作家にとって唯一無二の足跡であって、それを通してこそ作家としてのアイデンティティーが形を取っていく。『幸福な死』の出版を断念し、いわば公的にはこのテキストを葬ったとはいえ、その執筆体験はカミュにとってかけがえのないものであり、それがあったからこそ、彼は後に傑作『異邦人』をものにすることができたのである。したがって『幸福な死』の生成過程を綿密に、かつ正確に跡づけるというのは、作家カミュの自己形成の様相を解明するうえで根幹となる作業のはずである。

ところが、作家自身による『カルネ』の改竄に気が付かれないまま、旧版において断章48～50が36年2月の時点に置かれてしまったために、『幸福な死』の着想は実際の37年8月よりも1年半も早いというあやまった解釈が研究者のあいだに流布してしまった。しかしそうした前提に立つと、この小説の構想において1年半の不思議な空白が生じるということになり、カミュの作家としての自己形成を解明する研究が極めて難しくなってしまったのである。

例えば、『幸福な死』の単行本に寄せた校訂者ジャン・サロッキの『『幸福な死』の生成』という論考では、『カルネ』旧版の断章の位置を根拠に「このように『幸福な死』は1936年から38年にかけて着想され構成されたのである<sup>57)</sup>」と言明され、多くの研究者を惑わす結果となった。

あるいは、松本陽正氏による『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier Homme* の研究』は、カミュの作品の全体像を通じて『最初の人間』の位置づけを浮き彫りにしていくという浩瀚かつ野心的な著作であるが<sup>58)</sup>、次のような指摘にぶつかってしまう。「1936年始めの『手帖』から『幸福な死』の第二部を「現在形」と「過去形」との交錯によって、すすめようとしたことがわかる。[略] 1937年8月になると、第三部はすべて現在形にしたままで、第一部と第二部では各章をA（「現在形」）、B（「過去形」）に分け、AとBを交錯させた、かなり詳しい覚書が再び姿を現してくる。[略] これらの覚書の日付が『裏と表』執筆時期と刊行直後の時期を示しているのは興味深いことのように思われる<sup>59)</sup>」— 残念ながら、このように『幸福な死』と『裏と表』の形成過程を重ね合わせることはできないのである。

さらには、カミュにおける作家としての自己形成の過程を正面から論じきった、ジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシによる畢生の大作『アルベール・カミュ、あるいは作家の誕生』について述べておく必要があるかもしれない<sup>60)</sup>。このカミュ研究の大家をもってしても、『カルネ』第1分冊における断章の並びに関する真相を把握することができなかった。そのため、『ルイ・ランジャール』を始めとする他の初期作品の綿密な分析に比べて、『幸福な死』の形成過程についての論考にはあ

<sup>57)</sup> CAC1, p.8.

<sup>58)</sup> 駿河台出版社, 1999年。

<sup>59)</sup> 上掲書, p.68.

<sup>60)</sup> *Albert Camus ou la naissance d'un romancier*, Gallimard, 2006.

まり重きが置かれず，そのためか，やはり残念ながら，作家カミュの誕生における『幸福な死』の意義を軽視する結果を招いてしまっているのである。

## 10. おわりに

新プレイヤッド版における『カルネ』第1分冊の修正は，このような混乱に終止符を打ち，作家アルベール・カミュの研究における精度をより高めるための，またとない機会になるはずであった。だが，新版の編者のうち『カルネ』の担当者は，最も問題となっている3つの断章をまったく場当たり的に，何の明確な根拠もなく，不正確な位置に移し替えるだけで満足してしまったのである。

プレイヤッド版カミュ全集は，カミュ研究における底本である。そのプレイヤッド版において行われた修正は，自動的に権威を持ち，正確な情報として固定されてしまいかねない。今後は「『幸福な死』の出発点は36年11月」と言った記述が研究書に散見するようになる恐れがある。誤りを正したはずが，別の誤りを誘発してしまうのである。

新PL版における『カルネ』の編者が真相を見落とした原因は，『カルネ』の手書き原稿をきちんと精査することを怠ったからに違いない。ノートのページの切り貼りや移し替えなどは，しっかりと原稿にあたれば自ずと把握できるものだからである。そして仮に手書き原稿をまったく参照・吟味しなかったのならば，それは研究の底本を編纂する上で致命的な怠慢と言えよう。ことは『カルネ』の原稿に留まらない。プレイヤッド新版においては，注解では生原稿にしっかりとあたっている一方で，肝心の作品の本文については，改めて草稿類を検討することなく，以前の完本の原稿をそのまま採用したものがほとんどなのである。

研究者としては，たとえ底本といえども，いな底本であるからこそ，それに対して批判的な視線を保ち続けなければならないのである。

### 【使用略号】

**PLI** : Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome I (1935–1944), Gallimard, Bibliothèques de la Pléiade, 2006.

**PLII** : *Ibid.*, tome II (1944–1948), 2006.

**PLIV** : *Ibid.*, tome IV (1957–1959), 2008.

**PLT** : Albert Camus, *Théâtre, récits, nouvelles*, Gallimard, Bibliothèques de la Pléiade, 1974. (初版は1962)

**CAC1** : *Cahiers Albert Camus 1, La Mort heureuse*, Gallimard, 1971.

**CaI** : *Carnets 1*, mai 1935 - février 1942. Gallimard, 1962.